



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

「時のしるし」

粕谷 甲一
東京教区司祭

どの宗教でもよいのであれば、我々は宣教の動機を失う。世紀の命題とも言うべきこのテーマについての論争が長崎での諸宗教対話をめぐって起きていると聞いた。

これは一地方の問題というよりキリスト教が世界教となっていくために避けて通れない「時のしるし」を帯びたテーマでもある。

そこで論文ではなく、「論点の綴り」のごとき一文をしたためてみたい。

1. 人間は生まれた瞬間から神の似姿であり、すべての人にキリストの贖罪の効果及んでいる。その及び方というのが、第二バチカン公会議前は、洗礼を受けるまでは悲観的で、そのまま

では地獄行きと見えるが、公会議後は、イエス・キリストの十字架上の死によって、ある意味で全人類は洗礼を受けたと言っているという楽観主義になった。しかもなお、なぜ福音を宣教するかと言えば、ほっておくと地獄に落ちるからではなくて、神様は人間を自分の姿に似せて造り給うたのみならず、御子を十字架に架けるまでして救いに万全を期し給うたのだから、人間の救いは大丈夫だという楽観主義を証しするためである。そのままして下さったのだから、安心して昼寝しようではなくて、そこまでやって下さったからこそ、その神の至れり尽くせりの愛を証しするために地の果てまで行かなければ

ならない。そしてその宣教とは「信者作り」ではなく、第一に「弟子作り」(マタイ28・19)であり、主の如く愛によって人に仕えることを自らの本命とする人間形成にあり、そこに秘跡、戒律等の要理が含まれていることを忘れてはならない。これが新しい宣教であり、その神学である。

2. しかし問題はそう簡単ではない。

『カトリック教会のカテキズム』というローマで編纂したキリスト教教義説明の決定版を、日本の司教団が日本人向けに解説して「カトリック教会の教え」という表題で出版したが、その第一部と第四部が食い違っているところがある。

第一部で、原罪の伝わり方についてこう書いてある。

「根本的に考えてみましょう。罪は伝わるというところがわかりにくいですが、人は先天的に恩恵、つまり人の持っている神の命をたずさえて生れてくるのではない、と言えればわかりやすいでしょう。なぜならば、人は生きる中で、神との出会いをし、信仰によっていわば後天的に神の恩恵のない状態から神によって救われるのです」。人間は生きていく途中でそのチャンスに恵まれればきよめられる。

第四部は祈りについてであり、人はなぜ祈るかといえは、「それは神

から与えられたままに人は存在し、存在そのものの中には神の座があるからで、人間の存在には生れた瞬間から神が来ていらっしやる」。この第一部と第四部の食い違いを矛盾なく結びつける道は一つしかない。人間の心の神秘という「場」の解明で、それは余韻とか磁場という表現に頼るしかない。イエスの十字架上の死によって、全人類はある意味で……

余韻的に、磁場的に、そして……根本的に贖われている。それは「切れていて切れていない」という中間状態であり、その中間状態をどう説明するか。聖書によれば、御子は御父に、「どうして私を見捨てられたのか」と「切れた」断絶を叫ばれると同時に、「あなたの御手に私の霊を委ねます」と、「切れていない」永遠の一致を証しされている。マザーテレサはすべての人間の中には「その人と神様だけの密室」があり、それは切れないという。

そしてこれ以上は「論点」をこえて「論文」になるので、カットすることをお許しあれ。

このテーマと取り組む限り「時のしるし」と同時に「時のさからい」に出会うであろうが、そこにこそ時のしるしがあり、忍耐強く世界教への歩みを進めていきたいものである。

Q&A

「時のしるし」と

「時のさからい」



Q. わたしたちは、これまでカトリックのみが唯一・真の宗教であり、ほかの宗教は信じてはならないと教えられてきたのですが、最近この教えは変更になったのでしょうか。

A. 教えは不変です。イエス・キリストのみが救い主であり、教会がその救いの場であるという信仰に変わりはありません。

ただ、その意味していることへの理解の深さと広さはどんどん変わっていきます。このことを理論的に追いかけていくと大変な道のりをたどらねばなりませんので、身近なたとえで説明してみます。

両親の愛情をたっぷり浴びて育った子どもは「うちのお父さんは世界一だよ」と宣言します。「ばくのお母さんが一番だ」と言うでしょう。

この信仰宣言は、この子にとって唯一の真理です。客観的にもこの両親は世界一かもしれない。あるいはそうでないかもしれない。現実としても世界一であればこんな結構

なことはありません。かと言って、隣りの子どもが自分の両親のことを同じように「世界一」と宣言することを妨げるものではありません。どちらが世界一かということでは決着をつけようとするほど愚かなことはないでしょう。

同じようにイエス・キリストの愛情をたっぷり浴びて育った信者は言うでしょう。「イエスさまが一番、キリスト教こそが唯一・世界一」と。

「実るほど頭を垂れる稲穂かな」ということばがあります。カトリックは、頭を垂れてご自分を無とし、人々に仕えるというイエス・キリストの方法による世界一であることを、何はさておき、きっちり捉えておく必要があります。

Q. 教会という聖なる場所で、ほかの宗教や宗派の祈りをするのは許されているのでしょうか。

A. いま日常的に聖なる場で他の宗派の祈りが交わされている所と言えば、エルサレムのゴルゴタの丘ということになります。

ゴルゴタの丘はご存知のとおり、聖地の中の聖地であり、イエス・キリストの十字架の丘であり、聖なる場所の本来本元です。

いまここでは、キリスト教であるとはいえない五つの宗派の祈りが競うように唱えられています。無数の人々が行き交う雑踏と化した感のある十字架の山は、静かで荘厳な聖なる場所のイメージとは相当のギャップがあります。ですから、この状況につまづいてしまう人々もいます。

しかし一方では、世界の火薬庫といわれる分裂の地にあつて、イエス・キリストはいまもなお、ご自分を無とし、血を流したたせつつ、共生の姿を世に指し示そうとしておられる事実を目の当たりにして、感動する方々もおられるわけです。

「ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」(ルカ4・34)。

これはルカ福音記者が悪霊のことばとして紹介しているものです。イエスさまを聖なる者として正体を見破っているのですが、かまわないでくれと言って、関わりのない世界へ封じ込めようとしている悪霊の巧妙な謀略がうかがわれます。

聖なる場所もまた世界と関わらないための隔離された場ではないのです。むしろ関わりと共生に備える場なのです。

非日常的である10年とか20年に一度という時の幅で言えば、長崎教区では1974年に浦上教会で里脇枢機卿司式のミサに諸宗教の代表者の方々が与ったということがありました。その時、その代表者の方々の非常に敬虔な姿に参加者は感動したと伝えられています。

それから29年後の3年前、2003年11月に同じく浦上教会で諸宗教の祈りがなされました。もちろん日常的な形としては適切であるとは思われませんが、あのゴルゴタの共生の姿の再現という預言的意味を汲み取った方々もおられたわけです。

しかし、これは重いテーマを含んだものであり、「時のしるし」であるとはいえ、同時に「時のさからい」を生じさせることでもありましょう。

Q. どの宗教でも良いということになると、わたしたちは宣教に対する動機も熱意も失ないそうになるのですが・・・。

A. このことについては一面で粕谷神父さまが述べておられることをじっくり味わっていたきたいと思います。結論から言えば、征服型の宣教の時代を終えて、キリスト教は世界教となるためにその中身、つまり福音（よろこびのおとずれ）そのもので勝負する時が来たということになりましょう。他者に対して攻撃的・高圧的であるのは、それだけ自分が不

安定だからだということになります。福音すなわちイエス・キリストを掲げる限り、もうそのようなことは必要ないのです。

粕谷神父さまは他の著書で、諸宗教対話および宣教の典型的モデルとしてマザーテレサの実践を紹介しておられますので、その部分を引用したいと思います。それは1976年12月シンガポールで開催されたWC RP（世界宗教者平和会議）のアジア版である「AC RP アジア宗教者平和会議」の閉会式でのことです。

そのような中で閉会式が営まれ、マザーテレサが十分ほどの短いスピーチをされたわけであるが、その時全会場は深い感動の中に静まりかえり、有名なイスラム教指導者の議長が、「これで閉会式をうち切り、マザーテレサの言葉を参加者一人ひとりが胸に秘めて帰国の途につくのが一番いい。」と思わず述懐するほどであった。いったいマザーテレサは何を語ったのであろうか。そのような寛容の精神の最高潮に達した閉会式に於いて、それほど深い感銘を与えた言葉は、キリスト教という一宗教を離れた極めて一般的な人道主義的言葉であったのかと言えば、実は正反対であった。

彼女の語ったことは二つの聖体拝領のことであった。聖体拝領というのは、カトリック教徒がミサというキリストの最後の晚餐を象った礼拝式に於いて、パンとぶどう酒をキリストの御体と御血として拝領することを意味

している。このようなキリスト教的、しかもカトリックまる出しの表現で、何故全員の心を打ったのかと言えば、その内容が各宗教の核心に最も深く触れていたからである。

マザーは述べた。「私は毎日二つの聖体拝領をしています。一つ目は朝、パンの形でミサの祭壇から。そして二つ目は町の貧しい人の中で。例えばある日、カルカッタの町を歩いていると、どぶに一人のおばあさんが行き倒れていました。拾い上げてみると、体はねずみにかじられ蛆がわき、すでに意識がありませんでした。それですぐ『死を待つ家』に連れて行き体を抱いてあたためていると、急に意識を取り戻し、『ありがとう』と言って息を引き取りました。その顔は、それはそれはきれいで、その体は主の聖体でありました。その時私は第二の聖体拝領をしたのです。何故なら私にとってキリストの言葉はすべて真理であり、彼はパンの中にいるのと同じように飢えた人、凍えた人、見捨てられた人の中にもおっしゃったからです。」

（「亀裂を超えるもの」199ページ）

ちなみにマザーテレサはヒンズー教徒にはヒンズー教の教典を、イスラム教徒にはコーランを唱えてあげながら、死に水をとるという実践をされた方です。

去る8月31日、カトリック・センターにおいて「世界宗教者平和会議（WC RP）第8回世界大会」の報告会が開催されました。

新しい要理

「共に歩む旅」(2)

「共に歩む旅」の進め方



今回は、新しい要理「共に歩む旅」とはどんなものかということを紹介しました。今回は、この要理の具体的な進め方と注意点について説明したいと思います。

1. 聖書利用の位置づけ

新しい要理「共に歩む旅」では、聖書を通して神の現存に触れ、神のことばに照らして自分の生活を見つめ、信仰と生活の一致を図るように工夫されています。聖書から知識としての解答を得ようとすることではなく、神のみことばに耳を傾けながら祈るという方法で

聖書を使います。ですから聖書について研究し知識を積んでいく聖書研究と違い、わたしたちの中に生きておられるイエス・キリストと直接出会うという方法で聖書を読んでいきます。

2. 進行係の役割

求道者共同体に属する人なら誰もが進行係になれます。進行係は、求道者共同体がこの要理をうまく運んで導いていくことができるように助けを与える人であって、要理に対する知識を伝達する人ではなく、求道者共同体

とともに信仰の旅を歩みながら彼らを激励し共同体に活気を与える人なのです。

3. 進行方法

- ① 集いの参加者たちを歓迎します。
- ② 進行係は参加者たちに始めの祈り（主を招待する祈り）をするように要請してから、テキストの「わたしたちの生活」、「神のことば」を読むよう依頼します。
- ③ 進行係は参加者にこの本に出ている質問をします。参加者たちが質問をよく理解することができなければ繰り返します。
- ④ 進行係はなるべくたくさんの方が自分の意見を言うことができるように激励します。特に慣れない人々も意見を言うことができるように配慮します。
- ⑤ 進行係は、第一の段階から次の段階に移っていくために全体の雰囲気から、どのタイミングで次の段階に移っていかればよいか判断し準備します。
- ⑥ 参加者が質問をしたときは、進行係が自分で答えないで「この質問について皆さんはどう考え

ますか」「この質問について答えられる方がいらっしゃいますか」とほかの人に答えるチャンスを与えます。

(2) 進行係がそれぞれの段階で知っておくべき事項

① 始めの祈り（招待の祈り）

短い「自由な祈り」で主を招待します。この時進行係は、始めの祈りをする人を指名しないで誰でも自発的に祈りをする事ができるように導きます。また、進行係も祈りをする事ができますが、その時期は真ん中くらいにするのがいいでしょう。

祈りの内容は、愛する人とことばを交わすようにあたたかくて簡単なものにします。

* 始めの祈りの例文

- ・ 主よ、私たちと共にいてください。
- ・ 私たちは復活されたキリストが私たちと共にいらっしゃることを信じます。
- ・ 愛のキリスト、この集いの主人はあなたです。
- ・ 神であるキリスト、来てくださ

り、私たちに平和を与えてください。
 さい。
 ・主よ、この席においでくださり
 私たちの心を愛で満たしてください。
 さい。

②「わたしたちの生活」の段階

①写真(または文)は、わたしたちの生活の現実を表わしていて、それを見ることによって問題意識を持たせます。

②次にこの写真または文から感じたことを分かち合います。その際、いろんな質問と対話は、わたしたちの現実をふり返つてみて問題意識を持つように助けられます。

③進行係は参加者たちが積極的に参加することができるように激励し、手伝わなければなりません。進行係も参加者(求道者)と対等の立場で対話に参加しますが対話を主導しないようにします。

④対話の雰囲気が知的な討論に流れないよう導き、キリストがいっしょにおられるという霊的な雰囲気が維持されるように努めます。

⑤対話は、まず近くの二人が対話

をしてから(今後この二人の対話を「一組対話」と呼ぶことにします)その内容を全体でもう一度分かち合います。

③「神のことば」の段階

①キリストはみことばを通して私たちのところにおいでくださり、私たちともにおられます。したがって聖書のみことばはキリストの現存を現わす「準秘跡的しるし」です。

②聖書はわたしたちの人生を映してみることができると鏡です。

③聖書は参加者たちが誰でも朗読することができます。

④聖書のみことばを読んだあと、心に触れたみことばを分かち合います。

⑤聖書のみことばと一緒に提示された絵は聖書の内容を表現したものです。聖書のみことばと関連した聖書の絵をみながら質問に対する答えを交わします。

④「さらに一歩進んで旅を続けよう」の段階

①福音に照らし合わせて現実を眺め、具体的にどのよう生活(行動)するかを決める段階です。

②参加者たちが神のみことばにより変えられた人生を生きようと努力し、その体験をお互いに分かち合う時、お互いの信仰はより豊かになるでしょう。

⑤「聖書参考箇所」

提示された聖書の箇所を個人的にあるいは共同体でいっしょに読むことができます。

⑥「覚えましょう」の段階

この項には信仰生活をしながら求道者たちが覚えておくべきことが示してあります。従来の問答形式の要理と同じです。いっしょに読み、進行係は簡単な説明をすることができず。進行方法は次のとおりです。

- ①覚えましょう() ページ、() 番を見てください。
- ②どなたか読んでください。
- ③理解できない部分がありますか。
- ④この文は今日の分かち合いの整理のために役に立ちますか。

4. グループの自己評価

当日の課程が終わったら、以下の順序に従って自己評価をします。

自己評価は進行方法を改善するのに役立ちます。

①進行する間、霊的な雰囲気が保たれたか。

②進行係の導く方法はどうかだったか。

・進行係の使った方法の中で良かったものは何か。

・参加者たちを大人として接したか、逆に子どもを教える教師のように行ったか。

・あまり早く進行しなかったか、逆にあまりゆっくりしたのではなかったか。

・テキストに忠実に従ったか、逆に自分の解説や説明を付け加えなかったか。

・進行係が話しすぎて「支配」的にならなかったか。

・進行係はすべての人が積極的に参与するように配慮したか。

③参加者たちはどう参与したか。

・ある人があまり長くまたしげしばし発言して、ほかの人々の参加するチャンスをつぶさなかったか。

・討議する時お互いのことばに耳を傾けたか。

④集いを邪魔する要素はなかったか、など。

日本の教会の現状、課題、展望 (4)



溝部 脩 高松教区司教

5、国体との関係

日本教会の歴史の中で昔から今日に至るまで、いつの時代でも、日本という国、国体、神道、天皇とキリスト教の関係が問題になりました。これは非常に難しくしてデリケートな問題です。しかし、これも、各人が自分自身の判断で対処しなければならぬ課題として私は皆さんに残したいと思います。今、日本も新しい時代に入っています。先日の総選挙(2005.8)におきましても、結局は日本の国体、国是即ち、日本という国とは何かということがとても大きな課題

となつて提示されました。これは新しいことではなく、昔からの大きな問題の一つです。日本の古来の伝統にそぐわないキリスト教というのが禁教の原因でした。例えば、司馬遼太郎が「この国の形」という本の中で述べています。司馬遼太郎からの見識のある人でも、キリスト教というのは、日本の伝統、国体と合わないと言っています。

また、1578年の秀吉の「禁教令」ではこういうふうにあります。

「日本は神国たるところ、キリシタン国より邪法を授け候義はなほだもつて、しかるべからざる候」と。

日本は神の国であるのに、よそから来てキリスト教というのをもちたらし、日本の秩序を乱した。はなはだもつてけしからん。日本は「神の国」、神道が国の宗教であると言っているのです。

同じようなことを1614年家康の「禁教令」も言います。

「彼伴天連の徒党、皆件の政令に反し、神道を嫌疑し、正法を誹謗し、義を残し、善を損ね、形あるを見て、すなわち喜び、すなわち奢りて、自らは押し、自らは乱し、これを以てて宗の本懐となす。邪法にあらずして何ぞや」

よそから入ってきて日本がもつていた伝統と信仰と宗教を全部壊していく。これこそ、邪法でなくてなんなんだ！日本という国を崩していくのは許せない。日本という国は神道に基づいた伝統と秩序をもっている。キリスト教は神道を否定して、仏教を否定して、日本の今までもつていた秩序を全部崩していくではないかという疑念を持つていたのです。

この流れは江戸時代、明治維新でもそのまま残ります。浦上四番崩れの時に、キリスト教国である欧米諸国が浦上のキリスト教徒を迫害し強制的に移住させることはけしからんと抗議します。

それに対して大隈重信は「日本国が定めた法律に従って自分の国民を処分することについて、外国からの干渉は受け入れられない。日本は伝統的な神道の国であるから、キリスト教は余分なことなのだ。外国がどうこういう筋合いのものではない。我々の伝統を守る！」と返答しています。

6、明治政府の宗教の定義

明治政府は神道を通しての国づくりを考えます。

浦上の四番崩れで信徒達が殉教したというのはどういう意味だったのでしょうか。単に、苦勞して殺されたということ以上に、「信教の自由」を公然と宣言したことにあります。国家によって干渉されない、人それぞれが自由、良心の自由を証した、浦上の先達たちの生き方の素晴らしさを検証したいと私は思います。それは教会の中で信仰を守った偉人くらの意味ではありません。日本の憲法が述べている「個人の自由、信教の自由」、これを作り上げていった先達を顕彰するのです。

阿満利磨はこのようなことを言っています。「明治政府は神話を国家原理として選んだ。宗教はこの神話と付き合わなければならなくなった。」だから、キリスト教も仏教も全部、この神道という神話に基づく宗教でもない宗教とどのようにつき合うかというのが、明治から昭和にかけての一番大きな課題となったのです。

私たちの先輩の司教たちは、競争中に、この問題といやが応でも付き合わなければなりません。神道をどう考えるか、ひいては私たちが求めている国の形はど

んなものか、しつかり考えないと
いけません。今、新しい時代が訪
れている中で、信仰を持つ私たち
にはどういう役割があるのかを考
える良い機会が提供されているの
です。そして、こういう視点に立
つて、もう一度自分の信仰を見直
す必要があります。

明治政府は「宗教は私（わたくし）事であり国家のことは公のことである。」と分類します。国の祭儀を行うのは神道、天皇が祭儀の主となります。神道は「国家の大道であり、柱である。」「天皇は国民の理（ことわり）」と井上毅（こわし）が言っています。この井上は大隈重信と一緒に、浦上の四番崩れの時、長崎において中心人物として働いた人です。私たちにはこの天皇の問題を含めて、キリスト教とはなにかという問題が突きつけられているのです。

天皇制の解釈というのは常に問題でした。キリシタン時代というのは、国の統一に向けた時代です。織田信長、秀吉、家康と、国の統一原理となるのは神道というものの見方をしました。

明治維新も国がばらばらで統一が至上命令でした。国を統一する原理は神道でしかありませんでし

た。そこにキリスト教が入ってきたのですから、これは余計な存在なのです。我々が国づくりをしようとしているときに余計なものが入ってきては困るのです。この浦上の一隅で余計なことを信じて頑として動かない輩（やから）がいるのは迷惑でした。説得するが、聞かない。では、拷問するか、国賊として扱うより他に方法はあります。浦上の信者たちは、私たちが国賊ではない、天皇を尊敬し、日本という国を愛する。しかし、その上にデウスという神さまがいるのです。この信念は曲げられないと頑固に言い張るのでした。

明治維新は天皇を絶対視する神道論によって理論武装し、祭政一致と神仏分離を最も重要な政策としました。太政官という政治の最高機関よりも、さらに上位に神祇官という役職を置いて仏教の排斥を实行しました。しかし、いたずらに明治のあの頃の人たちを責めることはできません。国をどうしても作らなければならぬと考えていたのであって、そういう時に邪魔物は退けると考えたのは当然でした。

前述の一神教に戻りますが、こ

れは昔から日本の一番大きな問題であると言ってきた。先日、日本の司教団で「一神教」という勉強会を持ちました。岡田司教様と一緒に私も問題提起をしました。日本の教会は必ず一度は、バチカン公会議の「世界憲章」、パウロ六世の使徒的勧告「福音宣教」とかの教会文書を研究し直して、日本の中で宣教するとは何かについて基本的な見方を確立していかなければなりません。これは、何が何でもキリスト教に引き入れることでもないし、何が何でも説教だけをするだけでもありません。司教団も今は混沌として、これからどうやっていくのか、方向性が分かっています。

さらに明治政府は、民間宗教は全部迷信という形で捨ててしまったので、細々ともっていた日本人の宗教心は皆、迷信になってしまっている、公式の宗教としては神道を立てて、神道は他の宗教の上に立つものとなったのです。そのために神道は宗教ではなくて、すべての宗教を統括する一つの組織みたいなものとして考えて、全ての日本人が属する神社としたのです。究極の策として、神道は宗教ではないということにしてしまい、公の

宗教というのは、国の統制機関の一部に入っているという結果になりました。こうして、日本の中では宗教とは何かが全く分からなくなってしまうのです。

山折伏雄^{やまざきひでお}という宗教の教授が、「さ迷える日本の宗教」という本を出しています。

なぜ、日本で宗教というのが確立しないのか。なぜ、新々宗教とてくるのか。なぜ、既成の宗教、組織宗教が今全部力を失くし、影響力を失くしていつているのかという問いかけをしています。

既成宗教のキリスト教もその例外ではありません。混沌とした社会、世界観の中で、これだけの伝統をもっているキリスト教は今埋没しているかのように感じています。

何とかしなければならぬ。

そこで日本の教会は現代社会に對していろんな試みしようとしています。



聖書

豆知識



新約聖書の成り立ちは・・・

Q 前回は、どのようにして旧約聖書が成立したのか、またカトリックとプロテスタントの間に違いがあるのかどうかについて教えてくださいました。今回は、新約聖書について教えてくださいたいのですが。

A あまり難しく語っても意味がありませんから出来るだけ簡潔に、しかもわかりやすく説明してみます。

もともとキリスト教は、突如としてこの世に生まれ出た宗教ではありません。ある意味、ユダヤ教からイエスを中心として派生して生まれた宗教であると言えます。このことを背景に考えれば、前回見たように旧約の各書の正典性には違いがあるものの、旧約聖書そのものは、ユダヤ教とキリスト教の双方にとっては、まさに聖書であると受け留められ得ます。しかしイエスを油注がれたメシア（キリスト）である信じ、多様な意味でこのイエスを中心にして書かれた新約聖書を「聖書」として受け入れることについては、もしユダヤ教の人たちがイエスを受け入れることが出来なければ、そのことでユダヤ教の側から異論が出てくるとしても、それは当然と言えば当然です。しかし新約聖書は、決してユダヤ教の聖書に対して物議を醸し出すために存在し

ているわけではありません。あくまでもキリスト者は、イエスの言葉と教えそしてあらゆる活動には、人間を救おうとなさる神の思いが表れていると信じていますから、旧約と同様に新約も聖書であると考えてきたのです。だから私たちにあって、新約聖書は、紛れもなく聖なる書なのです。

とは言っても、一つ問題と考えることがここで浮かび上がってきます。それはイエス自身が、何も書いていないということですが、もし彼自身が新約聖書を書いていたら、後世の人たちは、その書全体の権威を最初から疑うことはなかったでしょう。しかし実際は、後に彼の後継者たちによって書き記されているわけです。そうになると、たとえ聖なる書を意図して書かれていても、全て正しく書かれていたとは限らず、聖書としての権威を全てに見出すことは出来ませんでした。キリスト教が異邦人の世界に伝播して、逆に異教徒たちの影響がキリスト教の中に及ぶにつれて、明らかに異端とも思える考えが、様々な書の中にも見られるようになりました。そこで教会は、歴史の中で、聖書として正典性があるかどうかについて厳正に判断を下してきたのです。

まず教会は、イエスに最も近かった使徒たちと使徒パウロの権威を認めました。何故ならば、彼らこそ正統な信仰の伝承者であることを疑う余地がなかったからです。こうした考えを基に、教会は何が正典であるか考えてきましたが、その決定は異端の影響もあって容易なことではありませんでした。例えば、二世紀半ばマルキオンは、福音（ルカのみ）とパウロの書簡（10の書簡のみ）だけを正典

として認め、旧約が聖書であることを否定しました。これは明らかに異端として見なされ、教会から排斥されました。またグノーシス主義と呼ばれる異端も、悪影響を与えたのも事実です。

そこで当時の教会は、典礼の中でいかなる書が使用されていたのかというのを考慮し、また教会の教父たちがいかなる書から自分たちが書いていたものの中に引用していたかということなどを踏まえた上で、最終的に今日私たちが聖書に見るような、福音書、使徒言行録、書簡群（パウロの書簡、全キリスト者への手紙）、黙示録という分類の下に、27書が編集されました。その中には、著者性（特にパウロ）や各書の成立過程に様々な疑問が投げかけられていることは確かです。

でもカトリック教会は27書をもって新約の正典とし、トレント公会議（1546年4月8日）で最終的に決定しました。プロテスタントの方も同様に、27書をもって新約の正典としています。だから新約聖書の正典に関しては、カトリック教会もプロテスタント教会も、同じ認識に立っているということが言えるでしょう。

（湯浅 俊治）





薬物依存症からの回復

私は「長崎ダルク」というところでスタッフをやっている者です。

最初に「ダルク」の説明をさせていただきます。全国に約40カ所ある民間の薬物依存症リハビリ施設で、Drug Addiction Rehabilitation Centerの頭文字をとってDARC(ダルク)といいます。この「長崎ダルク」は、先年亡くなられた島本要大司教様のご配慮で開所して今年で6年になります。

スタッフも利用者の人も全員、薬物依存症者本人だというのがダルクの特徴です。したがって、私自身も薬物依存症者です。20歳から8年間薬物を使い続けましたが、最後は生きることも死ぬことも出来ずにいた6年前に「長崎ダルク」に出会いました。

薬物という覚せい剤、シンナー、ヘロイン、コカインなど、違法のモノを想像される方が多いと思いますが、私が使っていたのは、薬局で売られている咳止め薬、鎮静剤、病院で処方される睡眠薬などのいわゆる脱法ドラッグで、それらを「酔う」という目的の為に大量に飲んでいました。初めて、薬物を使ったのは20歳のとき。当時の私は生きることに行き詰っていました。内向的で会社での人間関係になじめず、なんとなく流されて生きている自分がイヤだったので、何か刺激が欲しかったのです。そんな時、咳止め薬をまとめて一気のみすると気持ちよくなれる、ハイになれる、という噂を聞いたのです。早速、薬局へ行き、咳止め薬を3本飲んでみたら、確かに冴えて元気になるんです。体の中から込み上げてくるものがあって、テンションが上がります。普段の自分とは違い、怖いものがなくなるというか…これはいいなと思って、友達と会うとき、会社に行くとき、音楽を聴くときなど、いろんなときに使うようになりました。最初は調子よく使っていたのですが、薬の種類や量は時間が経つほどに増えていきました。咳止め薬だけでなく、鎮静剤や睡眠薬にも手を出すようになり、一日で100錠以上飲んでいた時期もありました。もう、ろれつは回らないし、足腰も立たないし、ベロベロに酔っぱらって、そりゃひどいもんでした。自分の生活が薬中心になっていき、乱れていきました。薬を飲んで車を運転し、田んぼに突っ込んだり、

友達とケンカになったり、自傷行為みたいなことをやったり、部屋でカレーをプチまけたりと、完全におかしくなっていました。これじゃいかんと思って、精神病院の保護室に入ったりするんですが、体が元気になって退院すると、「一回ぐらいだったら大丈夫やろう…」それでまた薬が始まって、元の生活にあつという間に逆戻りです。仕事もやめて、人に会わなくなって、ひとり薬をやって、また病院へと、そんな生き方をずっとくり返していました。

薬を使ってきたことで、失ったものといえば、金、仕事、友人、家族の信頼などたくさんありますが、「薬があったら、他は何もいらん」と思っていました。しかし、薬での底つきは自分で考えていた以上にきつかったのです。誰からも見向きもされない。必要とされない。いいようのない淋しさ。毎日薬局に通って、部屋に引きこもって気を失うまで薬を使う。しらふではきつくて外に出れないし、恐くて人にも会えない。そんな生活を続けていくことに限界を感じ、自信もなくなっていました。**使っているのは脱法ドラッグだから、やめようと思えばいつでもやめられると強がっていたのですが、現実にはボロボロになっている孤独な自分だったのです。**長崎ダルクに出会ったのは、それから間もない頃です。

今でもそうですが、私は弱い人間です。その弱さや生きづらいつ自分が受け入れられず、いつも薬を使い、酔うことで現実逃避していたのだと思います。しかし、**弱いままでもいい。正直になることで自分の弱さや生きづらさを解放していく。そこには薬物は必要ないということをダルクは教えてくれました。**

薬を使わないですむようになって6年が経ちました。薬を使わない生活なんて、できっこないと思っていましたが、それができている。**今では、過去に薬で失ったり傷ついたりしたことも、あるいは必要だったのかも思えないと思えます。自分一人の力で薬をやめられている訳ではなく、ダルクによってともに立ち上がっていく本当の仲間を得たからです。今後も「長崎ダルク」のご支援を宜しくお願い致します。**

西田 健一郎(にしだ けんいちろう)

平戸ザビエル

記念教会を訪ねて・・・



長崎教区では、宣教年間「ザビエル年」として聖フランシスコ・ザビエル生誕500周年を祝っている。そこで、「カトリック聴覚障がい者の会」では、6月18日に潜竜教会での訪問手話ミサのあと、平戸ザビエル記念教会へ巡礼した。その際、主任司祭は私たちの質問に手話付きで答えてくださった。

★平戸とザビエルとの関係を、少し教えてください。

ここ平戸にフランシスコ・ザビエルは三度訪れています。1550年8月、9月、そして、1551年3月です。その最初の年の1550年には、日本語に訳した本を読んだり、説教をして2カ月の間に100人が洗礼を受けたと言われています。

当時の平戸領主であった松浦隆信は、ザビエルを好意的に迎え、領内での布教活動を許しました。平戸でザビエルに宿を提供したのは木村という武士でした。その木村は家族とも洗礼を受けています。また、その孫のセバスチャン木村は、1601年に日本人で最初の司祭となり、1622年には長崎の西坂で殉教しました。

このようにして、長崎県では平戸からキリスト教が広まったのです。

★この教会について教えてください。

この聖堂が建てられたのは1931（昭和6）年です。それまでは上神崎教会の巡回地でした。大天使聖ミカエルに捧げられた教会ですが、平戸にザビエルが訪れたので「平戸ザビエル記念教会」という名称がつけられています。

聖堂の正面を外側からご覧になって、お気づきになられたかどうか分かりますが、普通、左右同じようにあるはずの尖塔が、右側にはありません。建設当時、非常に貧しかった信徒たちは、教会建設のために労働奉仕など大変苦勞して聖堂を建てたのですが、どうしてもお金が足りずに、右側の尖塔はとうとう造れなかったそうです。これも、当時を思い出すのにいいと思います。

また、聖堂建立75周年とザビエル生誕500年を記念して、今年4月、教会正面前庭にルルドを造りました。

★今年はどういうことを行われますか？

すでに4月7日のザビエルの誕生日に、平戸地区司祭団による生誕記念ミサをこの教会で行いました。また、10月12日にはスペインからの合唱団によるグレゴリオ聖歌の公演。12月3日には聖体行列と「ザビエル年」閉幕ミサなどが予定されています。

10月来日の合唱団は「スコラ・アンティクワ」という合唱団で、スペインでもめったに歌われることがないモサラベ聖歌も披露するそうです。主催者の説明によると、この聖歌は、「隠れキリシタン」のスペイン版のようなもので大変珍しい聖歌だそうです。日本ではもちろん初公開で、そのため、わざわざ東京などの県外から聴きにきたいという希望者も多いそうです。

このほかにも12月2日には、市民団体によるオ

ペラ「ザビエル」の上演があります。出来るだけ、多くの方が参加してくださり盛り上げて欲しいものだと思います。

★平戸の観光コースに入っていますか？

平戸観光の代表になっていて、隣接しているお寺と教会の景観が珍しいものになっています。ですから、巡礼者はもとより、観光客も大勢が訪れますので、聖堂の正面入口付近内部の一部見学のために開放していますが、それ以上、中には入れないようにしてあります。巡礼団や小グループなど、ミサやお祈りのために訪れる方であれば、事前に連絡をいただければ、いつでも入ることができます。やはり、祈りの場ですから、そのつもりでマナーを守って教会に訪れて欲しいと思っています。



巡礼者一同

ちなみに、長崎県内でザビエルに捧げられた教会は、市内（稲佐・神の島）・平戸（上神崎・西木場）・上五島（有福・福見・小値賀）・下五島（奈留・玉之浦）。



シンポジストは、金子眞介（「生と死をみつめるセミナー」代表）、柴田芳男（「長崎いのちの電話」理事長）、児島達美（長崎純心大学・大学院心理学教授）、牧山涼子（長崎精道小・中学校校長）の4氏。コーディネーターは長崎教区司祭（長崎純心大学・大学院教授）山内清海師。司会は東島真奈美氏（城山教会）。

シンポジウム

「いのちの尊さ」を

どう伝えるか

「いのちの尊さをどう伝えるかシンポジウム」が、実行委員会（宣教・家庭委員会）主催で、7月30日（日）午後2時から、長崎プリックホールを会場に約450名が参集し開催された。

まず、シンポジスト紹介後、表題について一人20分ずつの提言。シンポジストとコーディネーターによる2時間30分にわたる討議がなされ、会場は熱気と拍手につつまれ、如何に注目と期待が大きかったかを示した。

◆各シンポジストの提言

「子どもの性教育は命の尊さの基礎」 牧山涼子氏
生まれた時から愛され大切にされた経験と子どもの性教育は、命の尊さの基礎である。性の尊さ、清さ、愛の尊さ、責任が重要。正しい知識、強い信心、感謝、畏敬の念を持たせるための教育と対話が必要。

「命は授かっているものだ」 児島達美氏
頻発する事件は命の尊さへの希薄さによる。命は授かっているもの、命はあずかっているという考え方が重要だ。「待つ」ことも大切。子どもの教育は忍耐がいると言うことである。両親も頑張ることが必要だ。

「人間の尊厳と宗教的情操が必要」 柴田芳男氏
連続する殺人、自殺の急増。日本人のDNAから「いのち」「こころ」「おもいやり」が消失した、宗教的情操としつけが軽視されており、今後ぜひ必要なことだ。人格の尊厳を訴えたい。一人ひとりの人間が協力し合うことが必要。

「いのちの大切さと宗教の役割」 金子眞介氏
いのちの尊さを伝える事は重要かつ急を要する問題だ。現代の大人たちは「いのちの大切さ」を伝える程「いのち」の認識を持ち合わせていない。ここに宗教の役割がある。いのちとこの世の中の真相を解明し、生き方を示唆することが必要だ。

最後に、山内清海師は、コーディネーターの立場から4氏の提言に対し考え方を示すと共に、共通する点を指摘した。

- ・一つは教育の問題。小学校時代からの性教育の必要性と共に、人間の感性や人格の感性、人格的存在、人間であると言うことの認識を持たせることが大事。人間としてどう成長させるか、これが教育と思う。この教育観や人間の人格的感性なくして命の尊さは語れない。

- ・二つ目は、命の尊さに対する社会と我々大人の責任である。私たち一人ひとりが他人を尊敬しているかどうか。「教える権利があるのか」。現代社会は命を大切にしているわけではないか。1時間に133人の子どもの命が殺されている。そういう社会の中で、命を大切にしない、と誰が言えるだろう。

「一人ひとりがまずいのちを大切にし」、「いのちを大切に社会」をつくらねばならない。それは小さな流れから始まる。今日の集いが、立派な家庭と社会の構築に役たつことを心から願いたい、と結んだ。

生活教会 の中の



大野教会

フォトプラン 山本 富夫

新興地

佐世保北部、石盛山の麓に建つ教会堂。近隣には小・中・高校があり、生徒たちの声が絶えずこだましている。

一九五〇年、スカポロ外国宣教会が来崎し、俵町小教区の宣教司牧の任に就いた。

一九六一年、同会の援助などがあり、大野に木造の聖堂が建立され、俵町の巡回となった。

一九六八年、皆瀬小教区と合併し、大野小教区として独立。同時に、教区に移管された。

一九八二年五月、精美な現代的教会堂が献堂。

四十世帯ほどから始まった教会は今、千人を超える大きな小教区となっている。